連載 55

音は語る

文 藤盛一朗

ブロムシュテットとソヒエフ
破壊と終結の平和 交錯する表現

忘れられない体験がある。１９９５年１月のライプツィヒ・ゲヴァントハウス。ブロムシュテットがゲヴァントハウス管弦楽団を指揮したのは、ブルックナーの交響曲第９番だった。

目にくっきり浮かぶのは、第３楽章（終楽章）の終結。ホルンの上行は、若干乱れた。長身のブロムシュテットは、最晩年の穏やかな姿ではなく、すべてを支配する文字通りの指揮者だった。

ブルックナーの９番 20世紀の殺戮と崩壊予感

記憶は、断片として蘇る。第１楽章の猛烈なフォルテとニ短調の響き。大地を揺るがす第２楽章スケルツォ。全体として、終結の浄化より、この曲のはらむ非凡なエネルギーに圧倒されたのだと思う。

演奏が終わってしばし立ち上がれず、外に向かった時は、客席からほとんど聴衆がいなくなった時だった。ロビーでは売店の実直そうな人と客がにこやかに話していた。華やかな舞台・客席とは裏腹に、人々の様子は質素で、社会主義時代からそう時の経っていないことをうかがわせた。だが、ゲヴァントハウス管の公演は、聴衆の心の糧であることが伝わってきた。

１９８９年11月のベルリンの壁崩壊から５年ほど。翌90年10月の東西ドイツ統合から４年強。ベルリンからたどった旧東独の鉄路の車内は寒々として、バッハの《クリスマス・オラトリオ》を聖堂で聴いたドレスデンの町は、なお、第２次大戦の猛空襲の破壊がしのばれた。

終末的ともいえる殺戮と崩壊の20世紀。ライプツィヒの９番は、ブルックナーの予感した20世紀だったとその時は感じられた。ブロムシュテットは１９２７年生まれ。現代史の生き証人であり、その目は、人類や人間、社会の闇の深さを見つめ続けたはずである。



ライプツィヒ・ゲヴァントハウスでゲヴァントハウス管を指揮するブロムシュテット
（2011年11月26日、©Eric Kemniz）

ショスタコーヴィチの８番 「爆発」から立ち昇る人の声

ＮＨＫ交響楽団のこの11月７日の定期演奏会Ａプログラムの会場、ＮＨＫホールには、４日に亡くなったブロムシュテットの遺影が飾られた。２０２８年楽季から音楽監督となるソヒエフと楽員は、２０２５年10月に奏でられたグリーグの《ホルベアの時代から》から第２曲「サラバンド」を追悼演奏として捧げ、黙とうした。

後半のショスタコーヴィチの交響曲第８番は、特別な演奏となった。ソヒエフの指揮で聴くと、この曲には「物語」のあることが明確に伝わってくる。第３楽章から第４楽章への移り行きの爆発と、その後の怖ろしいほどの静けさは、戦争や、作曲時にはショスタコーヴィチが想像もしなかった原爆の惨禍すら想像させる。規則正しい低弦の奏でるリズムは、いやおうなしに死が覆う状況を思わせる。

やがてフルートとホルンのソロが立ち現れる。人の声と聴こえる。すべてが地に倒れ、崩れ去ったかにみえた状況の中から、人がつぶやき始める。フルートの震えは、おびえ。または目覚め。続くクラリネットもうめきつつ、「でも生きている」と語りかけるかのよう。そのクラリネット１番は、２番奏者に支えられつつ、ハ長調のソの音にたどり着く。

終楽章は、そのままピアニッシモのソ音で始まり、新たな世界が開かれる。ファゴットのソロには陽の光がさしている。それを受けるヴァイオリンのみずみずしさ。フルートとホルンの間では対話が始まる。

だが、旋律の先行きは怪しくなる。すさまじい爆発が再び起こる。続くバス・クラリネットには不気味さが残るが、それでもヴァイオリンやチェロのソロ、ファゴットの二重奏は光が勝る。そして、最後にヴァイオリン・ソロが明瞭にコーダを導く。コンサートマスターの郷古廉の演奏は、ピアニッシモに深い意味を宿らせた。フルートと弦５部の奏でるコーダの弱音はたゆたい、本当に美しい平和の世界となった。



Ｎ響定期で、ショスタコーヴィチの交響曲第８番を指揮するソヒエフ
（11月７日、NHK ホール。提供：NHK 交響楽団）

全曲の感動の頂点は、この移り行きにあった。ライプツィヒのブルックナー９番の、大不協和音から終結への移行が自然によみがえった。

ブロムシュテットが指揮したメンデルスゾーンの交響曲第２番《讃歌》の演奏にも思いが至る。第６曲は「私たちは闇の中で叫んだ　見張りの人よ夜はもうすぐ明けるのか」という問いと、「朝は来る。だが、まだ夜だ」というやりとりとなる。その後に「夜は過ぎ去った」の歌声が響き、第７曲の讃歌と、第８曲のしみじみした讃美歌へとつながっていく。

ブロムシュテット自伝の新版を会場で求め、増補された２０２５年のインタビューのページをめくる。「危機や戦争をどう思うか」という問いに、ブロムシュテットはこう答えている。「一日、一夜たりともそのことを考えずには過ごせません。私はそのことから目をそらすことができません、ウクライナ、プーチン。何晩も一睡もできないことがあります」（「音楽こそわが天命」アルテスパブリッシング）

希望を感じさせたバッハ 美しいことを想像させる良さ

ブロムシュテットは、現実社会に背を向ける人ではなかった。東日本大震災の被災者にも思いを寄せた。２０１１年９月には川崎市の洗足音楽大で学生オーケストラを指揮してブラームスの交響曲第１番を演奏している。その時、福島県いわき市から招かれた１５０人の市民に語った言葉をいわき芸術文化交流館アリオスがＳＮＳ上で公開した。それは《讃歌》の名演はもとより、創作や演奏という行為の意味を照らし出す。

「音楽の素晴らしいところは、ただ聴いていいなと思うだけではなく、世界中の素敵なことや美しいことを想像させる良さもあると思います。…音楽は皆さんの人生に少しでもそうした喜びを与えられると、私は信じています」

「ノーベル文学賞を受賞した南アフリカの作家ジョン・マックスウェル・クッツェーさんの話を紹介します。14～15歳のころ、人生に何の意味も失ってしまうような出来事が起きたのだそうです。自殺をしようと思いながら歩いていると、チェンバロの音が聞こえてきました。バッハの平均律クラヴィーア曲集第１巻第１曲のプレリュード。それを聴いた彼は『おお、世界には希望があるのではないか』と思ったそうです。そしてこの音楽がある限り、僕の人生にも何か意味があるのではないかと思ったそうです。もし今夜聴いていただく音楽を聴いて、皆さんがそういう気持ちになっていただくことができたなら、こんなにうれしいことはありません」



Ｎ響定期の会場、NHK ホールロビーに掲げられたブロムシュテットの写真